

ロマンティックを独り占め

目次

ロマンティックを独り占め	5
愛しの君に花束を	133
秘密の恋はバラ色に	247

ロマンティックを独り占め

春風の君へ

季節はもう秋です。

時折吹いてくる風も、だんだん冷たくなってきました。

でも、あなたのそばで吹く風は、いつも春のように暖かです。

まるで春の陽だまりのようなその笑顔。

どれほどまわりを癒しているか、あなたは知っていますか？

あなたが微笑むたび、わたしの心はメリーゴーランドのようにくるくると――

……ん？ 心はくるくるとは回らないか？

ずっと握り締めていたペンを置き、書きかけのレポート用紙を持って、改めて最初から読み返してみる。

——うーん、ちょっと違う気がしてきたぞ。でも「メリーゴーランド」って言葉は可愛いから捨

てがたい……

悩んだ末、レポート用紙を一枚破り、くしゃくしゃにまるめて後ろに放り投げた。そこには同じようにまるまった紙くずがいくつも散乱しているはずだ。

一人暮らしの良いところは、いくら部屋を散らかしても誰にも怒られないってこと。自分の限界が来たら片付ければ良いのだ。まあ、さすがに生ゴミだけはちゃんと捨てるけれど。

レポート用紙に向き直り、またペンを持つ。

ラブレターなんだから、もっと直接的な言葉が良いのだろうけど……。でもそれはちょっと恥ずかしいんだよね。それに「好きです」、「付き合ってください」、だけじゃちょっと物足りない。それじゃあ他のたくさん女の子と変わらないもの。わたしだけの特別な気持ちを表さなきゃ、このご時世にわざわざ手紙を書いて渡す意味がない。

目を閉じて、あの人の顔を思い出す。春の陽だまりのような優しい笑顔。

わたしの、わたしだけの春風の君。

今、わたし、当麻依子とうまよりこが頭をひねりながらラブレターを書いている相手は、同じ会社の竹下春樹たけしたはるきさん。四つ年上で、広報部に所属している。

わたしがその人を好きになったのは少し前のことだ。以前から気にはなっていた。端整で優しい顔立ち。すらりとした立ち姿。いつも柔和に微笑んでいて、名前の通り春のような人。周りにはいつもたくさん女の子たちがいて、まるでアイドルを追いかけるファンのように彼を取り囲んで

いる。

素敵な人がいるんだなど、最初はそれだけだった。どこの会社にも一人はいる、アイドル的存在で見ただけで満足で、それ以上は望まない。本当にただそれだけだったのに。

でも、あの瞬間、わたしの気持ちは変わったのだ。

それは数ヶ月前の夏の暑い日だった。茹だるような暑さの中、直属の上司であるにつき市ノ瀬先輩にお使いを頼まれて外出したわたしは、ふらふらになりながら、ようやく会社にたどり着いた。そしてエレベーターを待っていると、首筋にひんやりと冷たい何かが当たって、思わず声を上げて飛び上がった。

「あ、ごめん。冷たすぎたかな？」

驚いて振り返るとそこに竹下さんがいた。につこりと微笑んだまま、手にはペットボトルを持っている。

「あんまりにも暑そうだから、冷やしてあげようかと思って」

照れたように言い訳をするその人を見て、わたしの心臓はありえないほど大きく動いた。

「暑い中ご苦労様」

そう言いながら冷たいペットボトルをわたしの手に押しつけて、彼は去っていった。その後ろ姿が見えなくなるまで、まばたきをすることすら忘れていた。

頬が熱かった。それが暑さのせいなのか、さっきまで目の前にいた、まるで王子様のような人のせいなのか、それすら判断できない。ただ一つ確実にわかったのは、その瞬間、自分が恋に落ちた

ということ。

これまで生きてきた二十五年間で、できた彼氏はたった一人だ。大学時代にちよつとだけ付き合った人だけど、その彼氏にだつてこんなときめいたことはない。なんて単純な人間なんだろうと思う。こんな些細なことで、アイドル並みの人気者を好きになってしまうだなんて。

でもそれ以来、わたしの生活は竹下さん一色になった。寝ても覚めても彼のことが頭から離れず、彼の顔見たさに毎朝玄関ロビーで彼を取り巻いているファンに交ざった。

悔しいことに彼のファンの間ではわたしは新参者なので、初代メンバー（なんだそりゃ）より前には行けないのだ。はつきり言つて背も低めなので、輪の一番後ろでびよんぴよん飛び跳ねるしかなく、顔がちよつと見えればラッキーぐらいの感覚だ。

彼の周りはいつもそんな風なので、本人にはほとんど近づけない。あの夏の日、彼が偶然一人であそこにいたことは、今思えば奇跡のような一瞬だったのだ。あの時に告白しておけば良かった。まあ、好きになった直後に告白なんて、できるわけがないけど。それなら、せめて同じ部署だったら良かったのに……わたしは営業、彼は広報。

ああ、竹下さん、竹下さん、どうしてあなたは広報なの？ いつもしかめつ面のにつききり市ノ瀬先輩よりも、何倍も何十倍も営業向きのお顔なのに。

だから、わたしは決意した。今のままファンクラブ（？）の中にも、なんの進展も期待できない。周りでキヤーキヤー言つてる、集団の一人で終わりたくない。その中から一步踏み出すためには何をしたら良い？ 彼の印象に残るような何か。色々考えて、そして一つの結論に達した。つ

まり、ラブレターを渡すこと。

メールが主流の今の世の中、少しでもインパクトを与えるためには、手紙は有効な手段だと思った。幸いなことに文章を書くのは好きだ。小学校の時に書いた詩は、朝礼で校長先生から褒められたくらいだもん。

そう思い立って数日。家に帰って時間が許す限り手紙の文面を考えているけど、これがまあ、あまり上手くないかな。要は「好きです」って伝えるだけなんだけど、やっぱりそれだけじゃつまらない。他とは違う、特別な想いを知ってほしい。でも、それを言葉に表すのはとても難しい。

ここ数日で書き捨てた紙を集めたら、薄い詩集が一冊くらいできるんじゃないかしら。内容はちよつと……だけど。それはそれで、後で読み返したら楽しいかもしれない。

そんなことを考えながら、またレポート用紙に向かい、新しいページを開いた。

2

吹きつける風の冷たさに、わたしは思わず肩を竦めた。駅の周りは大きなビルが立ち並んでいるから、ビル風が強い。最近朝が徐々に寒くなっていったのに、この風のせいで余計に肌寒く感じる。そのせいではないけれど、わたしは会社に向かう足を次第に速め、最後の数十メートルはほぼ駆け足をしていた。

いつもより一本遅い電車に乗ってしまったって、朝から走ることになってしまった。だいたい、どうして家の鍵を決まったところに置かないのか、自分のうかつさを呪ってしまう。おかげで鍵を探しまくりに、朝の貴重な時間を無駄にってしまった。おまけに鍵は昨日脱いだ服の中に入っていたという始末……

一人暮らしを始めてから、同じようなことが何度あっただろう。それを聞いて呆れた隣人から鍵を入れるための可愛いケースをもらい、玄関の靴箱の上に置いていたのだけれど、その中に入れること自体忘れてしまうのだ。

もうちよつとちゃんとしようよ、わたし。心の中で自らを叱り、会社のビルに駆け込んだ。

中の暖かさにホッとした瞬間、女の子たちの悲鳴にも似たどよめきが聞こえた。

良かった、間に合った。急いであまり広くないロビーの片隅にできた、女の子たちの集団に近寄る。すでに何重にもなった輪の中心にはあの人がいるはずだ。そう、わたしの春風の君。

竹下さんは毎日同じ時刻、就業開始よりも少し早めに出勤するので、ファンの女の子たちはその時間に合わせて出社している。もちろん、わたしも同じだ。まあ、今日は遅れちゃったけど。

輪の一番外側で、今日もぴよんぴよん跳ねながら、時折ちらつと見える、茶色がかった柔らかそうなキレイな髪にとぎめく。

いつものことだけど、竹下さんは一人ではなく、同僚の荻野さんと一緒のようだ。

荻野さんは竹下さんと同じ広報部の人で、彼に負けず劣らず男前だった。竹下さんに比べると、荻野さんの方が少しクールで男っぽい。正反対な感じの二人だけども仲が良くて、一緒に見か

けることも多い。男前二人が揃っているので、周りの女の子のテンションも余計に上がる。だから毎回こんな騒ぎになるようだ。

何度目かのジャンプで、ようやくお顔がちらつと見えた。もうちよつとヒールの高い靴を履いてくるべきだろうか。五センチのヒールじゃ限界がある。でも、これ以上高いと外回りが辛いし……「抱き上げてやろうか？ 当麻」

突然、耳元で低い声がして、驚きのあまり思いつきり飛び上がってしまった。ようやくお顔全体が見えた！ と一瞬喜んだけれど、着地と同時に振り返ると、蔑むような笑みを浮かべた市ノ瀬先輩がいるものだから、一気にテンションが下がった。

「せ、先輩。……お、おはようございます」

「はい、おはよう。ほら、行くぞ」

相変わらずの愛想のなさで、集団の横をさつさと通り過ぎていく市ノ瀬先輩を慌てて追いかける。この集団をもつとせず、ずんずんと歩いている人は市ノ瀬稜りょうといい、同じ営業部で、わたしの直属の上司だ。年齢は五歳上の三十歳。長身だし顔もすごく良いんだけど、愛想はないし、いつも仏頂面ぶつどうめんか不機嫌そうな顔しからないから、竹下さんたちほどの人気はない。まったくない。全然ない。しかもイジワルで、わたしのことを奴隷だとも思っているのか、いつもこき使う。竹下さんの柔らかそうな茶色の髪と比べ、市ノ瀬先輩のは真つ黒で硬そうで、まさしく天使と悪魔だ。それなのに一部では、クールで素敵と思われているらしいし、どうやら彼女もいるようだ。世の中には物好きがいるものだ。

ま、彼のおかげで今日は朝から竹下さんの素敵なお顔を拝見できたのだから、よしとしよう。怪我の功名というやつだ。今日は良いことがあるかも。

自分の席に着いて、ウキウキと仕事を始めようとしたら、また背後でからかうような声でした。

「もう少し背が高ければ良かったな？ 当麻」

もうっ、ムッカつくっ。

見えないようにこぶしを作り、心の中で先輩を思いつきり罵ののした。

自宅の狭いユニットバスにお湯を張り、できる限りからだを伸ばす。ああ、今日も足が棒のようになってしまった。まったく、外回りは辛い。しかも、市ノ瀬先輩ったら歩くのが速すぎる。もうちよつと気を使ってくれば良いのに……なんてさりげなくそう言ったら、

「ああ、悪い。当麻の方が足が短かったな」

なんて言うのよ！ そこを突っ込む!? 違うでしょ、女の子だからでしょ!?

だから市ノ瀬先輩は嫌いだ。できることなら関わりたくないけど、そうもいかない。今は市ノ瀬先輩について得意先を回り、営業の仕事を教わっている最中なのだ。

それに……何より見逃せないのは、市ノ瀬先輩と竹下さんはどうやらお友達らしいってこと。時々だけど、二人で話しているのを見かける。何度か先輩に話しかけるふりをして近寄ろうとしたけれど、いつも他の人に先を越されるのだ。だから、次の機会には絶対竹下さんとお近づきになれるよう、できるだけ我慢して先輩にくつついている。

あーあ、恋って試練の連続なのね。むくんだ足をさすり、膝を曲げてお湯の中からだを沈めた。お風呂上りに冷たい水を一杯飲む。パジャマを着て、バスタオルを頭にのせたまま、部屋の真ん中にあるテーブル代わりのコタツに座った。天板の上に置きっぱなしにしているレポート用紙とペンを手元に引き寄せる。

明日はお休みだから、今夜は遅くまで書けそう。そろそろ真面目に考えてまとめていかないと、とは思いますが、その一方で時間がかかっても、読んだ瞬間に自分の想いの全てが伝わるような、素敵な手紙にしたいとも思う。

実際に渡すならどこが良いだろう。会社だとちよつとロマンティックさに欠けるよね。それに、邪魔がいつぱい入りそうだし。例えば海に見える丘とか、夜景のキレイな高台の公園とか……

キラキラした何かを背景に彼は立っている。あの優しい顔で、もじもじしてるわたしを励ますように笑いかける。

『あ、あの……』

震える手で手紙を渡そうとするけど、どうしてもできないわたし。それを察した彼が、手を伸ばして、手紙を持っているわたしの手首をそつと掴んで持ち上げる。

『君のこの手紙の中には、どんな素敵な言葉が入っているの？』

そう言いながら、わたしの指先にキスを……

「いやーんっっ！」

自分の妄想に思わず悲鳴を上げた。そのままバタンと背中から倒れ、ごろごろと床を転がる。

ありえるっ。ありえるわっっ。そして、竹下さんはそんなシチュエーションが許される人なのよっっ。

足をバタバタさせていると、突然ピンポンと玄関のチャイムが鳴った。

ヤバイ、うるさかったかな？ 慌てて立ち上がり、ドアのそばにあるインターホンを取った。

「は、はい」

『うるさいよ、依子』

「り、里都ねえ？ ちよつと待って」

頭に絡まったバスタオルを外し、手ぐしで短い髪を整えながら玄関のドアを開けると、隣の部屋に住んでいる、わたしの良き隣人、青柳里都あおやなぎが立っていた。

「夜中に暴れないの。何事かと思うでしょ？」

「ご、ごめんさーい」

里都ねえはニヤツと笑うとコンビニの袋を掲げた。

「花の金曜日なのに、一人寂しい君にお土産を買ってきたぞ」

「……里都ねえだつて同じじゃん」

部屋に入る里都ねえが通りやすいように壁に寄って、そう呟く。

「わたしはたまたまなのよ」

里都ねえはそう言いながら、コタツの上に袋を置いた。

わたしがこの部屋に引越してきた時から、里都ねえは何かと面倒を見てくれている。たった三

つしか離れていないのに、彼女はものすごくしつかり者だ。しょっちゅう鍵を探すわたしを見かねて、誕生日プレゼントに可愛い鍵入れを贈ってくれたのも里都ねえだった。

「あら、仕事中？」

里都ねえの声に我に返る。見ると、コタツの上に缶チューハイやらおつまみを並べていたらしい彼女が、レポート用紙を手にしていた。

「ううん、ラブレターを書こうと思って」

わたしがそう言うと、里都ねえはピタリと動きを止め、それからゆっくりと振り返った。

「……ラブレター？」

「うん。ほら、言わなかった？ 好きな人ができたって」

里都ねえの向かい側に座り、袋の中からお菓子を出すのを手伝った。

「聞いているわよ。竹なんとかさんだっけ？ すごくカッコいい人なんでしょ？」

「そう。竹下さん。いっつも周りにファンの女の子がたくさんいるの」

レポート用紙を天板の端に寄せ、里都ねえから受け取った缶チューハイで乾杯してから一口飲んだ。うーん、やっぱり風呂上がりにはこっちだな。

「どうしてラブレターなの？」

もう一口飲もうかと思ったところで里都ねえが聞いた。缶を置いて、うーんと首を傾げてみる。どうしてって？ それは、特別なことをしたいと思ったから、だろうか。

「奇をてらってみようかと思って。インパクトがあるでしょ？ ラブレターって」

「……まあ、ねえ。ちよつと見ていい？」

「うん」

里都ねえが置いてあったレポート用紙を取り上げ、ページをめくった。

「……わたしの心はメリーゴーランド？ ……なんの歌詞よ？」

「ラブレターだってば」

わたしがそう言うと、里都ねえが小さくむせた。

「……も、もうちよつと普通の言葉の方が良いんじゃない？」

「でも、それじゃあ味気ないでしょ？」

「……伝わることの方が大事じゃないかな？」

「素敵な言葉で表したいの。……でも、どうしてもポエムっぽくなっちゃうんだよねえ」

また一口チューハイを飲み、里都ねえが買ってきてくれたスナック菓子の袋を開けた。

「あんだ、学生の時、文芸部とかだった？」

「ん？ 違うよ、バレーボール部」

「……なるほど。……ここにもドリーマーがいたか。そういえば名前も似てたわ」

「何？」

「ん？ いやまあ、会社に似たような人がいるのよ。その人は読んで想像する系なだけどき。あんたは書く系なのねえ」

スナック菓子を頬張っているわたしを見て、里都ねえがしみじみと言った。

「何よ、書く系って」

「色んなタイプがあるんだなってことよ。勉強になるわ。さ、気を取り直して飲もう」

里都ねえはレポート用紙を床に置き、わたしに新しい缶を押しつけた。

なんだかスッキリしないけど、促されるままにチューハイをぐいっと飲んだら、ちよつと気分が良くなってきた。さきイカやらチョコレートやらを食べつつ、二本目のチューハイを空けたら、さらにふわふわと気持ち良くなってきた。そのせいか、急に頭の中に素敵な言葉と映像が溢れてくる。「里都ねえ！　こういうのはどう？」

「は？」

「あなたを見かけるたびに、妖精の羽に落とした雨の雫のように、わたしの心は震えるのです」

何だか歌うように言葉が出てきたぞ。満足して里都ねえを見ると、彼女はぼかんと口を開けていた。

「……………ファンタジーもありなんだ」

「えっ？」

「いや、うーん。まあ、ちよつとわかり辛いんじゃない？」

「そうかなあ」

「素直に好きですって書けば良いじゃない」

呆れたような里都ねえにひらひらと手を振る。

「やあだあ。そんなストリートに書いたら恥ずかしいでしょお」

「……………妖精の羽の方がよっぽど……………」

ぶつぶつ言う里都ねえの声を聞いていると、また頭の中に言葉が浮かんだ。

「じゃあこれは？」

「……………まだあんの？」

「冷たい吹雪の中で出会った、暖かなかまくらのような——」

「もういいって」

里都ねえが手を振って遮った。

「ええーっ。これからのにいい」

中途半端なところで切られたので、頭の中の吹雪がふっと消えてしまった。せつかく思いついたんだからもつたいたい。そう思い、床に置かれたレポート用紙を取って、さっきの言葉を書きつける。妖精の羽って可愛いじゃない。ペガサスの翼っていうのも良いかも。せつせとメモっていたわたしに、また里都ねえの声がかかる。

「それより、あなたの先輩の話をしてよ」

里都ねえが言っているのは市ノ瀬先輩のことだ。前に先輩の愚痴を言ったら、やけに先輩のことが気に入ったみたいで、それ以来何かと話を聞きたがる。頭の中に急に市ノ瀬先輩のイジワルな顔が浮かんで、妖精もペガサスもかまくらもどこかに行ってしまった。

「……………えー、市ノ瀬先輩の話なんてどうでも良いよ。今週もイジワルでした。それだけだもん」

里都ねえに今朝の嫌味な会話を話したら、

「ふーん。なるほどね」

と、いつもの何を考えているのかよくわからない顔で言った。その顔を見ながら、里都ねえと市ノ瀬先輩ってちよつと似てるなあなんて思ってしまう。先輩もあの仏頂面ぶつちやうめんのせいで何考えてんだかわからないんだよね。

その後も金曜日の深夜番組を見ながら、里都ねえと楽しくおしゃべりをして、散々飲み食いした。0時を回った頃にようやく片付けを始めると、ゴミをまとめていた里都ねえが、部屋のゴミ箱いっぱいいっぱいの紙くずも大きいゴミ袋にまとめてくれた。

「依子、ノートパソコン持つてるでしょ？」

「うん」

小さなキッチンで洗い物をしながら返事をする。

「手紙の推敲すいこうはそっちでやれば？ 書き直すのも楽よ。ゴミも出ないし。今の時代はエコよ」

「あ、そっか」

パソコンはネットしかしてなかったけど、そういう使い方もできるよねえ。

「うん、じゃあ次からそうしてみる」

部屋が片付くと、里都ねえが大きく伸びをした。

「あーあ、もう寝よ」

玄関まで一緒に行き、扉を開ける。

「じゃあね、おやすみ」

「おやすみなさい。ご馳走ちそうざま様でした」

ひらひらと手を振る里都ねえに声をかけ、扉を閉める。しばらくして隣の部屋の扉が開く音が聞こえた。

まだお酒が残っているから、足元がふらふらする。でもからだはぼかぼかしていて、気分は良い。残念ながら手紙は進まなかったけれど、いくつか素敵な言葉を思いついたので良しとしよう。

そしてこの土日は里都ねえに言われたようにパソコンでやってみよう。そうだよ。いちいち書き損じて紙を破くこともないし。

眠い目をこすりながら部屋の電気を消し、ベッドにもぐり込む。枕に顔を押しつけると同時に、睡魔が襲ってきて、わたしはあつという間に眠ってしまった。

3

出社早々、わたしは営業部の自分の席に座り足をさすった。今朝も朝からジャンプをしたせいで足が痛い。でもまあ、また竹下さんの見目麗みめ麗しいお顔を見られたから満足だ。

今日も素敵すてきだったなあ……。この汚れた世界の中で、神々しいまでの透明感……——ん、今の言葉も良いんじゃない？

慌かばんてて鞆かばんの中の携帯電話を探す。もたもたしながらメモ画面を出し、ぼちぼちとボタンを押した。こうごうしい、透明感……と。

里都ねえのアイディアのおかげで自宅のゴミの量は激減した。ノートパソコンのテキストファイルの数だけは膨大になってしまったけれど、データのサイズ的には大したことはない。

問題は移動中や会社の中だったりする。この頃は暇さえあれば文面を考えているので、こうやって家の外で思い浮かんだ時はちよつと困る。忘れないように携帯にメモをするのだけれど、元々メールを打つのも速くないので、もたもたしているうちに忘れてしまうのだ。それは非常にもったいない。

メモ帳でも持ち歩くなあ……。やつぱり携帯で打つより速いし。でも、そしたらまたゴミが増えるだろうか。この前エコを意識したばかりなのになあ……

何かないかと椅子に座ったまま社内をぐるりと見回すと、コピー機のそばにある箱が目に入った。それはミスコピーや書き損じた書類を入れる箱だ。

これだ！ と思い立ち、その箱から数十枚の紙を取ってきた。散らかった机の上にスペースをあけ、裏が白いことを確認してから、二、三枚ずつ半分に折って、それを定規で切った。

ふふふ、ナイスなアイディアじゃない？ これならエコだし、良いよね。束にしてからダブルクリップで留めれば、即席のメモ帳になるじゃない。

社外秘の書類が紛れていないか、一応表側も確認しながら、鼻歌交じりにテンポ良く折って切っていると、背後で人の気配がした。振り向くより前に、低い声が頭の上から降ってくる。

「当麻、何遊んでるんだ？」
顔を上げると、案の定、市ノ瀬先輩が冷ややかな顔でわたしを見下ろしていた。

「遊んでません。エコですよ、エコ」

わたしがそう言っつて、ミスコピーで作ったメモ用紙を見せると、先輩は半ば呆れたような表情を浮かべた。

「……まだどっかで覚えてきやがったな」

「失礼な。前から知ってますって」

少し頬を膨らませて反論すると、バカにしたように鼻を鳴らされる。まったくもう、ムカつく男だ。「もうすぐ出るぞ」

市ノ瀬先輩はそう言うときささと自分の席に着き、外回りの準備を始めた。

「えっ、あ、はいっ」

わたしも慌てて立ち上がり、机の上から必要な書類とミスコピーの束を取って鞆かばんに突っ込む。そしてさっさと部屋を出ていく市ノ瀬先輩の後を必死で追いかけた。

「待ってくださいよー」

エレベーターホールでようやく立ち止まった先輩は、小走りで駆け寄るわたしを呆れたような顔で見ている。

「転ぶなよ」

「転びませんっ——」

そう言った瞬間、足首がぐきゅつとなった。やつぱり転ぶかと思ったけれど、次の瞬間市ノ瀬先輩がわたしの腕を持って支えてくれていた。

「落ち着け」

「あっ、ありがとうございます」

エレベーターの扉が開くと同時に、先輩の手が離れた。彼の後について乗り込み、その背後に立つ。自分がそっつかしいことは自覚しているけど、やっぱり気まずい。この靴が悪いのかしら。ジャンプもできないし……。そう思いながら足首をぐりぐりと回していると、先輩が振り返った。

「痛めたか？」

「えっ？ いえ。全然平気です」

慌てて手を振ってそう答える。市ノ瀬先輩は眉間にちよつとしわを寄せると、また前を向いた。

まったく、先輩はイジワルなんだか親切なんだかわからない。まあ総じて無愛想なだけけど。なんだろう、このギャップが一部マニアに受けるんだろうか。わたしから言わせてもらえば、イジワルな人なんてダメだと思う。好きな人にはいつでも優しくしてほしいもの。

頭の中に穏やかに微笑む竹下さんの顔が浮かぶ。自然と込み上げてくる笑みを堪え、先輩の後に続いてエレベーターを降りた。

地下鉄に乗り込み、数駅先で降りたところで先輩が口を開いた。

「今から行くところは機種替えを考えているんだ。俺たちの仕事は、一番価格の高い最新型を売り込み、さらに他の機械も替えてもらうことだ」

「はー」

うちの会社のメイン業務はOA機器や業務用機材のリースと販売だ。ニーズに合わせてパソコンからコピー機、電話機、果ては文房具や書類棚までなんでも揃える。いかに顧客を増やすかは営業の腕に掛かっているのだ。無愛想な市ノ瀬先輩に、営業は向いてないんじゃないかと思っていたけれど、意外にも先輩の成績はトップクラスだったりする。

「新製品のパンフレットと仕様書を渡して……」

歩きながら話していた先輩の足が突然ビタリと止まった。

「どうしました？」

「まずい、価格の変更表を忘れた」

「ええっ」

「最後にコピーをして、その後の記憶がない。まったく。FAXしてもらおうか……」

先輩が鞆かばんから携帯を取り出すのを見た時、ふと何かが頭の中を横切った。あれは確か……

わたしは自分の鞆かばんの中を探って目的のものを見つける。

「あの、これじゃないですか？ 半分に切っちゃいましたけど……」

耳に携帯電話を当てていた先輩の前で、ミスコピーで作ったメモ用紙の束の中からそれらしき紙を数枚抜いてひらひらと振った。それを見て驚いた先輩が携帯を下ろす。

「それだ。どうして？」

「ミスコピーの箱の中から取ってきたんですよ。間違っただけじゃなかったんですかね？」

「……お前の突飛な行動も、役に立つことがあるんだな」

その言い方に若干むくれると、先輩がわたしの頭をぼんと軽く叩いた。「とにかく助かった。行くぞ」

市ノ瀬先輩は近くのコンビニに駆け込み、セロテープを購入した。場所を借りて半分になった紙をテープで貼り合わせ、一度コピーをしてから、持っていた修正液で繋ぎ目を消したり、少し消えてしまった文字を書き足したりして、ほぼ原物と変わらないものを作り出した。

「……器用だなあ」

出来上がった書類をコピーしながら、こつそりとつぶやく。わたしもこれから鞆かばんの中にセロテープとか修正液とかはさみとか入れておこう。何かあるかわからないもんね。

その後、何事もなかったように時間通りに顧客先に入った。市ノ瀬先輩が先方に最新式の製品の説明をされたわら、わたしはパンフレットを広げたり、書類を出したり、時々先輩が振ってくるちよつと難しい仕様説明に辛うじて答えたりしていた。結果、無事に最新機のリース契約までこぎつけ、おまけに事務機十台とパーテーションの契約までとることができた。

毎回不思議なんだけど、市ノ瀬先輩の話し方って説得力があるんだよね。いつも無愛想でとつつきにくいのに、ちゃんと契約が取れるんだもん。わたしも同じようにできるのか、ちよつと不安だ。今は一緒に回っているけれど、その内これを一人でやらないといけない。わたしは人見知りはない性質だから、そういう意味での緊張はないが、それだけで契約が取れるわけもない。今はそのノウハウを学ぶために、先輩についてあちこち回っているのだけど、見て覚えるってとても難しい。全てを終えてビルから出ると、珍しく市ノ瀬先輩がホツと息をついた。

「良かったですねえ」

「……そうだな。なんだ、その顔は？」

おつと、顔に出ちやつたかしら？

「別にい……。でも誰のおかげでしょうねえ」

わざとらしくそう言ったら、先輩が苦笑いした。

「当麻のおかげだよ。……よし、ご褒美にお前の言うことをなんでも一つ聞いてやるよ」

「えっ!？」

驚いて思わず立ち止まると、先輩も足を止めた。

「願い事を言えよ、当麻」

見上げた市ノ瀬先輩の顔がすごく意味深に見えて、ちよつとだけドキドキした。

いつつもイジワルばかりの先輩に、一つでも「命令」できるなんて……。どうしよう、何にしよう。あ、命令じゃなくて、お願いか。

ランチャやちよつと値の張るディナーをご馳走してください、とかいうのは、ちよつと違うと思う。もういちいち嫌味を言わないでくださいとか、一回殴らせてくださいとかも違うかな。今わたしが一番望んでいることはなんだったらう。

その時、頭の中に春の陽だまりのような笑顔が浮かんだ。

ああ、そうだった。わたしはそれを望んでいたんだ。

「竹下さんとお近づきになりたいんです。協力してください!」

「……は？」

わたしが勢い込んで言ったので、市ノ瀬先輩が一步後ずさりながら面食らったような顔をした。以前ペットボトルをもらったけど、あれは近づいたとは言えない。それどころか彼が私のことを覚えているかどうかも怪しい。

「だから、竹下春樹さんですって。広報の。先輩とお友達でしょ？」

「……友達じゃない」

「でも、時々お話されてるじゃないですか！」

「……まあ」

「ちょこつとで良いんです。一回で。一回紹介してもらえればそれで良いんです」

わたしの熱意に押されたのか、先輩が微妙な表情を浮かべ、渋々といった様子で頷いた。

「やったー！」

先輩はびよんびよん飛び跳ねるわたしを冷ややかな目で見ながら、

「朝もそれだけ飛べれば良いのにな」

と言うと、一人でさっさと歩き出した。いつもならカチンとくるセリフだけど、目の前の未来が限りなく明るく見え始めたわたしには、まったく気にならなかった。

いつも通り残業になってしまったけれど、仕事が終わった後も気分は上々だ。満員電車もなんのその。浮かれ気分ですの改札を抜けると、後ろから誰かにぽんと肩を叩かれた。

なんだ？ と振り返るとそこに里都ねえが立っていた。

「おかえり。遅くまで大変だねえ」

「里都ねえこそお疲れ様」

「一緒に帰ろ。でもその前にコンビニに寄って」

「いいよ」

彼女と並んですぐ近くのコンビニに向かいながら、ホッと息をつく。わたしたちが住むアパートまでは駅から歩いて十分ちよつとあるので、やっぱり夜に一人で歩くのは心許ないのだ。

コンビニでパッと買い物をして、二人並んで歩きながら、今日のことを考えていた。

今日は本当に良いことだらけだった。仕事もまあバッチリだし、なんとと言っても市ノ瀬先輩と約束したんだもん。もしかしたら、明日の朝には、早速竹下さんがわたしだけに微笑んでくれるかもしれない。一度でも接点ができれば、後はなんとかかなると思う。

「なんかいいことでもあったの？」

「えっ？」

隣を見ると、里都ねえが少し呆れたような顔で、わたしの顔を指さした。

「ニヤニヤしてる」

ああ、幸せって顔に出してしまうのね。

「えへへー。実はね……」

込み上げてくる笑いを堪え切れないうま、今日あったことを里都ねえに話した。

「これで少しはお近づきになれるよね！」

あまりの期待感に思わず声が大きくなってしまったわたしを、里都ねえが意味深な顔をして見た。「なるほどね……。ま、上手くいけばいいけど」

その言い方が何かを含んでいるように聞こえたけれど、舞い上がっているわたしにはそれも気にならなかった。

4

市ノ瀬先輩と約束してから数日が経つけれど、わたしは相変わらず女の子の輪の一番外側を跳んでいた。

ああもうっ、今日は髪の毛しか見えないじゃない。内心イライラしながら、それでも頑張っ飛ばし跳ねていると、すぐそばで、

「この前のジャンプ力はどうした？」

というイジワルな声が聞こえた。パツと振り返ると、そこにはやっぱりいつもの冷めたような笑みを浮かべた市ノ瀬先輩がいた。思わずその腕を掴んで、女の子の群れから離れる。

「おっと。朝から大胆だな？ 当麻」

からかいを含んだ声にジロツと睨み返し、ロビーの端まで来てから腕を離れた。

「約束はどうしたんですか!? 約束は！」

詰め寄るわたしを市ノ瀬先輩が面白そうな顔で見下ろしている。そしてとぼけたように言った。

「約束って？」

「もうっ。たっ……竹下さんのことです」

名前の部分だけを小声でささやく。

「ああ」

急につまらなそうな顔になった先輩に、わたしはさらにムカついた。

「……もしかして、忘れてました？」

「……」

先輩はふいと顔を逸らすと、そのまま無言で歩き出した。

「酷いっ。約束したのにっ」

わたしが叫ぶようにそう言うと、先輩はさらに歩くスピードを上げ、ちやうど来たエレベーターに乗り込んだ。慌てて後を追いかけたけれど、わずかの差で扉が閉まり、わたしだけその場に残されてしまった。

ム、ムカつくっ。地団駄じだんだを踏みながら次のエレベーターに乗って営業部に入ると、市ノ瀬先輩は、「さあ、仕事仕事」

と言いながら、わざとらしく書類の束をめくり始めていた。

く、悔しい。この数日、わたしの心がどれだけ期待に溢れていたか……

ギリギリと奥歯をかみ締め、自分の机の上に鞆かばんを放るるように置いた。

お昼前までデスクワークをして、その後いつものように市ノ瀬先輩と外回りに出かけることになった。顧客先の近くのファストフード店に入り、向かい合ってお昼ご飯を食べるのも、まあよくあることなのだけど、朝のことが糸を引いているわたしは、まだふくれっ面のままだった。

「……そう怒るなよ」

ハンバーガーにかぶりついたまま、ふと目を上げると、市ノ瀬先輩が困ったような顔をしてわたしを見ていた。さすがに反省したんだろうか。口が塞がっているため返事ができないしていると、先輩がコーヒーを一口飲んで、頬杖をついた。

「……何がきっかけだったんだ？」

「……へ？」

「竹下だよ」

「……どうですか？」

ごくんと呑み込んでから口を開く。

「……ある程度は情報がないと、協力もできないだろう？」

そういうものなの？ でも、ようやくやる気になってくれたようなので、ここは素直に言うことを聞くべきだろうか。

「えっとですねえ……」

言葉を搜しているうちに、あの暑い夏の日の思い出が一気に甦よみがえってきた。

ギラギラ照りつける太陽、その熱さとは正反対の、ペットボトルの冷たさ。それから、あのどろけるような笑顔。世界中の時間が止まった、わたしが恋に落ちた瞬間。気がついた時にはわたしはそのことを熱く語っていた。

「……そんなことか？」

うつとりと余韻ひびに浸ひたるわたしの耳に、市ノ瀬先輩の呆れた声が届き、バラ色の世界が一瞬で消える。もうっ、いい気分だったのにつ。

「それだけで十分なんです！」

言い返したわたしを、先輩はすごく胡散うさんくさそうな目で見た。

「いいじゃないですかっ。好きになるきっかけなんて、大抵些細なものなんですから」

市ノ瀬先輩は肩を竦すくめて、今度は自分もハンバーガーにかぶりついた。しばらくの間ほぼ無言になる。あらかた食べ終わった後、一息ついた先輩がまた口を開いた。

「お前の希望はあるのか？」

「え？」

「どんな風に協力すれば良いんだ？」

やっぱりやる気になってくれたようだ。嬉しくなって、思わず前のめりになる。

「そうですね……」

頭の中に竹下さんを思い浮かべる。ここまでお預けされたんだから、ただ紹介してもらっただけで

は物足りない気がしてきた。

どんな風にすれば、自分に関心を持ってもらえるだろうか。まずはわたしの存在を強く意識してもらうことが大事だけど……。何かインパクトのある出来事があれば――

「例えば、先輩が急にお腹が痛くなったりするんです」

「……は？」

「それで、わたしがどうしたんですかって介抱しているところへ、竹下さんが通りかかるんですよ」

「……………で？」

「で、ああ彼女はなんて優しい女の子なんだって思ってもらえるじゃないですか？」

「……なんだその小芝居は？ 俺は時代劇に出てくる町娘か!？」

珍しく声を荒らげる先輩がちよつと面白い。

「じゃあ、タイミング良く階段から落ちそうになったわたしを竹下さんが受け止めてくれる……とか？」

少女漫画とかによくあるパターンだけど、結構ドラマティックで良いじゃない。

「……どうやってタイミング良く落ちるんだよ」

「それは先輩が偶然を装って突き落としてくれれば――」

「俺を犯罪者にする気か！ お前おかしいぞ！」

先輩がゾツとしたように叫び、後ろに仰け反った。

「そんな怖い感じじゃないですよお。その時のわたしは、背中にまるで羽が生えたように、ふわり

と竹下さんの腕の中に落ちていくんですから……」

ああ、なんてロマンティックなの。

思わずうつとりとしたわたしの前で、市ノ瀬先輩が驚愕の表情を浮かべていた。

「……まあ、冗談ですよ、冗談」

あまりに驚かれたのでへらへらと笑って手を振ると、今度はおかしなものを見るような目で見られた。気を取り直して、姿勢を正す。

「本当に冗談ですって。最終的には手紙を渡したいんです。そのきっかけが欲しいんですよ。今のままじゃ、近づくことさえできないから」

「……手紙？」

「ラブレターです」

思わずキヤツとつぶやき、両手で熱くなった頬を隠した。そつと顔を上げると、先輩がすごく奇妙な顔をしてわたしを見ていた。

「……ラブレター？」

「はい。最近毎晩書いてはいるんですけど、良いフレーズが見つからなくて……」

「単刀直入に書けば良いだけだろ？」

なんだか里都ねえと同じこと言うんだなあ。

「それじゃあ味気ないじゃないですか」

反論すると、また胡散くさそうな表情で先輩が眉を上げた。

「……例えば？」

その言葉に、鞆かまの中からミスコピー用紙で作ったメモ帳を取り出した。

「なんだそれは？」

「思いついた言葉を書き留めてるんです。携帯に打つより速いから」

「……そのための紙だったのか……」

その声がちよつとがっかりしているように聞こえたけれど、構わずにメモ帳をめぐつた。

「えつと、この前思いついて気に入ったのが……」この汚れた世界であなたはまるでたった一つの

奇跡。——どうですか？」

期待を込めて先輩を見ると、なんだか変な顔をしている。

「……どうですかって……それはなんかの歌詞か？」

「ラブレターですってば」

わたしがそう言うと、先輩がまた微妙な顔になった。

「本気か？」

「至極」

わたしが頷くと、

「……ちよつと貸せ」

そう言つて、わたしの手からメモ帳をひったくつた。

「えーっ、返してくださいよお」

わたしの手をかわし、先輩がメモを一枚めくる。

「……わたしの心はメリーゴーランド。あなたから吹く穏やかな風に吹かれてくると回りま
す……？ 風を起こすなんてアイツは超能力者か!? それにメリーゴーランドを回す風が穏やかな
はずないだろ!? それじゃあ台風だ」

渾身こんしんの一節なのにっ。文句を言う前に、またページがめくられた。

「月明かりを見上げ、夜空の星の中にあなたを探します……。今度は死んでるじゃないか!?」
そうかしら？」

「春の陽だまりのようなあなたのそばで、妖精が舞うような……もう人間から離れてきてるぞ」
「もうっ、返してください」

いちいち文句をつける先輩の手からようやくメモ帳を奪い返し、鞆かまの中にしまった。そしてキッ
と睨んでやると、先輩が真剣な顔でわたしを見ていた。

「当麻、一っだけアドバイスをしてやる。それはラブレターとは言わん」

「もう、だから今考え中なんですってばっ」

「もつと根本から考え直せ！」

「何を書いても良いじゃないですか。もう、先輩はとにかくつかけを作ってくれば良いんです
っ。約束でしょ？」

先輩が疲れたようにため息を一つついた。

「……どうしてたかだか手紙を渡すのに小芝居がいるんだ？」

「だからあれは冗談ですって。ちょっと紹介してくれるだけで良いんです」
まあ本心を言えばちよつとやってみたかったけれど……へへつと笑うと、先輩がもう一度ため息をついて立ち上がった。

「……行くぞ」

「あ、待ってくださいってば」

慌てて最後のポテトを口に入れ、飲み物で流し込む。そして鞆かばんを肩にかけてトレイを持つと、急いで先輩の後を追った。

外回りを終えて会社に帰ってきた頃には、足が棒のようになっていた。エレベーターの中で、こつそりと靴を脱いで足をブラブラと振ってみると、一瞬にして血の巡りが良くなる。

ふと隣に立つ市ノ瀬先輩をこつそりと見上げる。ほぼ一日一緒に行動していたのに、先輩は相変わらず涼しい顔をしている。元々先輩は無愛想で何を考えているのかよくわからないけど、今日のお昼は珍しく表情が豊かだった。とは言っても、わたしをバカにしながらのものだったので、驚く以前に腹立たしいけれど。

エレベーターから降りて廊下を歩いていると、偶然にも前から竹下さんが荻野さんと一緒に歩いてくるのが見えた。うわつ、ラッキー！

「あ、ほら先輩！ 今ですよ、今！ 声をかけてくださいっ」

市ノ瀬先輩の背中をつんつんとつつき、小声でせつついた。

「……いや、今はやめておけ」

「ええーっ、どうしてですか？ チャンスなのに」

言葉通り、先輩は声をかけることなく無言のまま二人とすれ違った。すれ違い様さま、竹下さんがぺこつと頭を下げてくれたので、わたしも大袈裟なくらいに頭を下げた。荻野さんもちらつとこつちを見てくれたけれど、市ノ瀬先輩はどちらも無視した。

先輩の背中を睨にらんでから、名残惜しさに振り返ると、数人の女の子たちが彼らを取り囲むのが見えた。

「あーあ、やっぱりさっきのがチャンスだったのに……酷い」

「まあ、そのうちにな」

素っ気無いその言い方に、またカチンと来る。

「もうっ。協力してくれる気があるんですか？」

「……一応は、ある」

一応って何よ!? わたしが文句を言う前に、先輩は歩くスピードを上げ、さっさと営業部に入っ
ていった。

逃げやがったな。朝と同じ展開に、思わずまた地団駄じだんだを踏んだ。

仕事を終えて、くたくたになって家にたどり着いた頃にはすっかり夜も遅くなっていた。

アパートを見上げると、里都ねえの部屋に電気が点いているのが見える。誰かに愚痴りたくて仕

方がなかったわたしは、自分の部屋に入る前に里都ねえの部屋のインターホンを鳴らしていた。

「どうしたの？」

「ちよっと、聞いてっ！」

部屋着姿の里都ねえは、勢い込んでそう言ったわたしを部屋に上げ、

「まあ、落ち着きなさいよ」

と、温かいお茶を入れてくれた。うずうずしながらスーツを着たままコタツに足を突っ込み、里都ねえが座るのを待つ。

「もう、市ノ瀬先輩ったら酷いんだよ！」

「だからどうしたのよ」

今朝からの流れを話すと、最初は真剣に聞いてくれていた里都ねえだけど、ラブレターの文面を散々けなされたあたりでゲラゲラと笑い出した。

「笑いごとじゃないよ」

「ごめんごめん」

そう言いながらもお腹を抱えてまだ笑っている。

「あーあ。なんだ、先輩ってまともな人なんじゃない」

ようやく落ち着いた里都ねえが、涙を拭いながら言った。

「ちがーうっ」

叫ぶわたしをまあまあとなだめる。

「だって、その後だって、会社で竹下さんと偶然会ったのに、話しかけてもくれなかったんだよ。

あの約束はなんだったのかと言いたい！」

「……ふーん」

里都ねえはそう言って、熱いお茶を一口飲んだ。

「要は、依子が手紙を渡す時に協力してもらえば良いんでしょ？」

「まあ、それはそうなんだけど……できれば渡す前にもうちよっとお近づきになりたかったんだもん」

「大胆なんだか、奥ゆかしいのか、わかんない子だねえ」

ちよっと呆れたように里都ねえが笑った。

「だって、久しぶりなんだもん」

「何が？」

「恋をするのが」

「……ほほう」

だって、本当にそうなんだもん。

初恋は小学生の頃だった。相手はクラスで一番かけっこ速い男の子。運動会で誰よりも大きく声を上げ、選抜リレーでトップを走る彼を応援した。ちなみに中学を卒業するまでその子にずっと片想いをしていた。

二回目に好きになった男の子は、高校の生徒会長だ。朝礼や委員会で発言する彼をウキウキしな

がら眺めた。

その男の子たちとそれからどうなったかと言うと、どうにもなっていない。応援するだけで終わり、ウキウキするだけで終わった。今思えば、それらは“恋”と言えるかどうかも怪しい。でも大抵の女の子ってそういうもんだと思う。事実、クラスの約半分の女子は彼らに憧れていた。ちゃんと恋愛をするのはもっと大人になってからだ。

初めて彼氏ができたのは大学生の時、向こうからの告白で付き合うことになった。嬉しくって舞い上がって、ただ楽しくて。でも楽しかったのはわたしだけだったみたいで、あつという間に振られて終わった。理由はよくわからない。最後の頃に“君って結構がちゃがちゃしてるんだね”と言われたのは覚えていられるけれど。

“がちゃがちゃ”というのが“がさつ”という意味であれば、まあ当たっている。片付けベタだし、落ち着きがないって言われるし。それで振られてしまったのだとしたら悲しいけれど、こればかりは性格だからどうしようもない。

特別ショックだったわけでもないけど、以来、なんとなく好きな人もできなかった。でもそれが悪いことは思わない。恋愛だけが全てじゃない。仕事は楽しいし、友達や里都ねえと遊ぶのも楽しいもの。

今回、久しぶりに恋をして、自分でも舞い上がっている感は否定できない。でも久しぶりだからこそ完璧でありたい。子供の頃みたいにただ見ているだけじゃなく、最初の彼氏の時のようにただ受身じゃなく。自分が思うままにしてみたい。だからこそ、苦手な市ノ瀬先輩にもお願いしている

んだから。それで振られてしまっても、きつと後悔はしないだろうと思う。

「……早く手紙書いちゃおう」

コタツの天板に頬をのせてそうつぶやく。

「ま、頑張んなさい」

里都ねえがわたしの頭に手を置いた。その手がとても温かくて、なんだか涙が出そうになった。

5

それからまた数日、先輩もわたしも思ったより忙しくなってしまったせいか、竹下さんとはなんの進展もなかった。それでも、毎朝欠かさず女の子たちに交ざってジャンプを続けていることは言うまでもない。

ほぼわたしの一言メモと化したミスコピーのメモ帳は、枚数だけがどんどん増えている。自分で書きためておきながら、ちよつとうんざりしてきた。

フリーズばつかり考えても仕方がないし……そろそろ本格的にやろう。本番に向けてレターセットでも買ってこようかな。もつとやる気が出るかもしれないし、ちよつと週末だし。

そう決意した日、偶然にも定時に仕事が終わった。会社の外にいたけれど、そのまま直帰しても良いとのことだったので、駅の向こうにある大きな文房具屋に行くことにした。

一緒にいた市ノ瀬先輩にそれを告げると、なんと一緒に行くと言い出した。仕事の後まで先輩と一緒になんて……とは思うものの、男の人の視点で選んでもらうのも良いかもしれないと思い直し、連れ立って歩く。

「何をかうんだ？」

隣を歩きながら市ノ瀬先輩がわたしに聞いた。

「レターセットですよ」

「手紙でも書くのか？」

「……先輩、本気で言ってます？」

今まで散々何を聞いていたのかと睨みながら見上げると、市ノ瀬先輩がニヤッと笑った。

もう、またからかわれた。こんな人と一緒に行つて何になるのかと改めて自問しながら、混雑する駅の地下道を歩いていた時、

「稜！」

すれ違いざまにかけられた声に、市ノ瀬先輩が立ち止まって振り返った。つられてわたしも振り返る。

すると一人の女の人がこつちを見ていた。二十代後半くらいのキレイな人。長い髪、おしゃれなコートにヒールの高い靴。上から下までつついマジマジと見てしまいたくなる。でもどこかで見たとのことのある人。あれは確か……

その時、市ノ瀬先輩が小さな舌打ちをするのが聞こえた。ふと見上げると、いつもの何を考えて

いるのかよくわからない、無愛想な顔になっている。

その女性がこちらに歩いてきた。間近まで来た時、彼女がうちの会社によく来る取引先の営業の人だと気がついた。

「偶然ね」

その人が先輩に向かって微笑んだ。それとは対照的に先輩はむっつりとしている。

稜つて先輩の名前だわ。もしかしてもしかすると、これが噂の彼女かしら？

思わずニヤニヤしそうなになるのを堪えていると、彼女がわたしの方をちらっと見た。

「誰？」

「……」

先輩がなぜか黙ったままなので、慌てて挨拶をする。

「営業部の当麻依子です。いつもお世話になっておりますっ」

ぺこつと頭を下げると、彼女がああ、とつぶやいた。

「稜の後輩の子ね。松本沙耶です。この人、愛想がないから大変でしょ？」

そう言つて、微笑みながら松本さんが市ノ瀬先輩の腕をぼんと叩いた。

この親しげな仕草は、やっぱりそういう関係？

「そうですね……」

答えながら、思わず先輩を見上げると、照れているのかやっぱりいつもの無愛想な顔のままだ。

彼女と二人でいる時もこんな感じなのかしら？

「稜、どこに行くの？ 仕事はもう終わった？」

松本さんはそう言いながら、先輩のスーツの襟を長い指でなぞった。見ているこっちがドキドキするような、そんな仕草。

「……いや」

ようやく口を開いた先輩は、その手を避けるように一歩下がる。えっ、もう終わってますが？ 思わず口に出しそうになったわたしを、先輩がギロツと睨んだ。うっ、どうして睨むの？

「悪いが、今からまだ用があるんだ。当麻、行くぞ」

先輩はそう言うと、わたしの腕を掴んで引きずるようにして歩き出した。

「稜！」

先輩が振り返る。

「今夜、電話するわ」

それには答えず、市ノ瀬先輩は無言のまま、また歩き出した。引きずられたままなので足がもつれて転びそうになる。そこで先輩が腕を離してくれたので、ようやく自分のペースで歩けるようになった。

先輩の態度は多少疑問に思うけれど、なかなか面白いものを見れたので良しとしよう。

「市ノ瀬先輩の彼女さんって、松本さんだったんですねえ」

「……彼女じゃない」

ぶっきらぼうな言い方がまたおかしい。

「別に照れなくてもいいじゃないですか。美人な彼女さんって良いですねえ」

「……彼女じゃない」

同じセリフを繰り返す先輩の声が、さらに機嫌が悪そうなものになったのでちよつと焦る。これ以上突っ込むと本当に怒られそうだ。

「へえ、そうなんですか」

棒読みのような返事でやり過ごす。

もう、照れてるのかしら？ だいたい、あれを彼女と言わずして、なんと言うのか。

なんとなく不機嫌になってしまった先輩と地上に上がり、駅へ向かう人波に逆らうように歩いて目的の文房具屋に着いた。

「デカイな」

市ノ瀬先輩が見上げながらつぶやいた。そこは六階建てのビル一棟がまるまる文房具屋さんという、とても大きなお店だ。入った瞬間から様々な文房具が並んでいるのが見えて、わたしのテンションも徐々に上がっていく。エレベーターの横にある案内板で目的の階を確認して、ドキドキしながらエレベーターに乗り込む。扉が開いた瞬間、また大量のカラフルな文房具が目飛び込んできた。

「わーっ、いっぱいある！」

珍しく市ノ瀬先輩を後ろに従えて、ウキウキしながらレター用品が置いてある棚に向かった。目移りするほどたくさんある便箋を一つ一つ見ていく。

「うーん、どういうのが良いですかね？」

「さあな」

後ろから聞こえてくるつまらなそうな声に振り返る。

「もう、せっかく一緒に来てるんですからアドバイスしてくださいよ」

「……何をだ？」

面倒くさそうな言い方にカチンときつつ、数冊の便箋を手にとって、先輩に見えるように柵の上に並べた。

「ほら、色とか柄とか、色々あるじゃないですか」

「自分の好きなもので良いだろ」

「相手のイメージに合わせたいんです。竹下さんって何色が似合うんでしょう？」

「知るか」

当てにならない先輩の言葉は無視して、頭の中に竹下さんを思い浮かべる。春の陽だまりのような微笑。やっぱり春らしい色が良いだろうか。

「ピンクは可愛すぎますかねえ。……ブルーかなあ、グリーンかなあ」

端から一つ一つ中を確認しながら見ていく。やっぱり春っぽいのは薄いグリーンか。でも、季節的に言えば今は秋冬だから、ちよつと違和感がある気がする。

順に見ていると、サイドに縦の紺色のラインが入った白地の便箋が目に入った。デザインはシンプルだけど、嫌いではない。見た瞬間、なぜか市ノ瀬先輩の顔が思い浮かんだので、それを取り出して先輩に見せた。

「先輩のイメージはこれですね」

後ろから覗き込んできた先輩がふーんとつぶやく。ちらつと見るとまんざらでもない顔をしているので、まあまあ気に入ったんだろうか。

まったく、この人はどうしてわたしについてきたんだろう。文句ばかりでちつともアドバイスしてくれないし、自分の買い物をする様子もない。

暇なのかしら？　なんて思いながら、気を取り直してまた続きを見ていく。全部見て回ったところで、先輩にうんざりした目で見られたけれど、また最初に戻った。色々考えたけど……

「やっぱりこれにしよう」

散々悩んで決めたのは、薄桃色の地に白いラインが引かれ、うつすらと花柄が型押しされたものだ。

「ラブレターっぽくて良いですよね！」

先輩に「ほら」って見せたけど、当然ながらリアクションはない。最初から期待はしていなかったの、気にせずお揃いの封筒を探していると、先輩から声がかかった。

「……おい。お前、なんで同じ便箋を二冊も買うんだ？」

言われたわたしの手には薄桃色の便箋が二冊と封筒が一つ。

「え。だって、書き損じて無くなっちゃったら困るじゃないですか」

「……どれだけ失敗する気だ？」

苛立たしげな声に肩を竦める。もう、先輩ったらすぐけんけん言うんだから。

「保険ですよ、保険」

そう言つて便箋を持ったまま手を振ると、先輩も呆れたように肩を竦めた。レジに向かう途中で、今度はたくさんの封緘^{ふうけん}シールが並んでいるのを見つけた。

「あ、こういうシールも必要ですよね？」

わたしが立ち止まって指をさすと、
「……いらないだろ」

と、またやる気のない声で言う。

「普通のシールじゃ子供っぽいしなあ……」

しやがみこんでまた一つ一つ見ていく。

「……そもそもラブレターを書く時点で子供っぽいじゃないか」

頭の上から聞こえてくる面倒くさそうな声に、ちよつとムカついた。

「もう、先輩うるさい」

文句を言いながらも便箋と同じような花柄のシールを見つけたので、それを買うことにした。上機嫌でレジに向かい、精算をしてからまたエレベーターに乗る。

「買い物は終わりか？」

一階のボタンを押したわたしに市ノ瀬先輩が尋ねた。

「後はペンですね」

「ペン??」

聞き返してきた先輩に頷いてみせる。

「ペンくらい家にないのか？」

「新しいのが良いんです」

「どうして？」

「その方が縁起が良いでしょ？ 験^{げん}を担ぐんですよ」

その瞬間扉が開いた。同時に先輩がボソツとつぶやく。

「……結局は神頼みか」

その言葉を無視して、先にさつさとエレベーターを降りた。一階は筆記用具のフロアで、様々なメーカーのカラフルなペンが、これまた大量に売られていた。呆れた視線を投げてる先輩をよそに、気になるものを一本ずつ試し書きしていく。

「色はやっぱ黒の方が良いですよね」

「普通はな」

「ピンクの便箋だから、ブルーとかでも可愛いと思いませんか？」

「……読みづらいと思うぞ」

「ああ、そうですねえ。じゃあやっぱり黒かなあ」

様々なメーカー、持った感触や太さの違うペンを試し書きして、これだと思う一本に絞った。そのペンを三本まとめて買ったなら、また先輩が変な顔をしたけれど、今度は何も言わなかった。欲しいものが全部揃ったので、すこぶる満足して店を出る。

「飯でも食っていくか？」

腕時計を見ながら先輩が言った。いつもなら遠慮したいところだけど、今は買い物も終えて気分も良いからお付き合いしよう。ま、先輩は大してアドバイスもしてくれなかったけど。

「先輩のおごりですか？」

期待して見上げたけど、ジロツと睨まれたので慌てて手を振る。

「うそそうそ、行きましよう」

先輩と並んで歩き、近くの居酒屋に入った。

週末の夜なので店内は混んでいる。テーブルに向かい合わせに座るなり、ビールと料理をたくさん頼んだ。すぐに運ばれてきたビールで乾杯し、ぐいっと一口飲む。

「おいしい〜っ。やっぱり仕事終わりの一杯は最高ですね」

「まあな」

買い物もできたし、ビールも美味しいし。忙しかったけど良い一日だった。

続々と料理が来たので、先輩と半分こしながら食べた。……まあ、食べた量はわたしの方が多かったかもしれないけど。お腹がいっぱいになったせいとか、二杯目のビールを半分ほど飲んだあたりで、だんだんと気持ち良くなってきた。

「そういえば、先輩と松本さんはどこで知り合ったんですか？」

普段なら絶対に聞けないようなことを聞いてしまうのも、きつと酔っ払っているからに違いない。わたしのちよつと不躰な質問に、市ノ瀬先輩は眉間にしわを寄せた。

「……そんな関係じゃない」

「またまたあ〜。いくら恋愛経験の乏しいわたしでも、それくらいはわかりますよお」

「……乏しいのか。やっぱりな」

ひらひらと手を振ったわたしを見て、市ノ瀬先輩がイジワルそうにニヤツと笑った。

「ちよつとっ！ そこは聞き流すところですよ！」

「はいはい」

先輩が肩を竦めてビールを呷る。どうやら自分の「彼女」については語りたくないらしい。

市ノ瀬先輩がどんな恋愛をしているのか、ちよつと興味があったんだけどな。今日の感じを見るのと、先輩はどうやら彼女に対してもつつけんどんだ。わたしだったら嫌だなあ。彼氏になる人には、他の人の前でも優しくしてほしいもん。竹下さんだったら、きつとそうするはずだ。そのためにもまず……。隣の椅子の上に置いてある、文房具屋の紙袋に自然と目が行く。

「……手紙、どうやって渡したらいいですかねえ……」

「さあな」

ほろ酔いの頭の中で竹下さんが笑っている。そつちに気を取られていたから、先輩の素っ気ない言い方も大して気にならない。

「うーん、例えばですよ？ 竹下さんの机の中に手紙をそつと入れるわけですよ」

「……ほー。いつ入れるんだ？ 昼間は無理だろ？ 夜か？」

からかうような先輩の言葉は聞き流し、頭の中に浮かんできたストーリーを続ける。

「で、朝、彼が来て引き出しを開けて、それを見つけて読むんです。その後急に立ち上がった——」